

聯合艦隊艦砲射撃教範

1515

聯合艦隊艦砲射擊教範

總則

第一 本則、各級職員、射擊、關於教育完全之目的トシテ、

第二 本則、教章、各級職員、指級、應、其教育訓練、必要トシテ、

及其教練演習、方法、即、

第三 第一、第二、第三、射擊、教育、關於、最初、此、順序、方法、

依、此、順序、其、演習、順序、及、演習、單、演習、及、内、砲、

射擊、行、

豫備射撃、配置、在、此、射撃、場、

又、本、章、中、第三、乃、是、射撃、之、艦砲、操、法、教、範、今、時、之、

也、

第四

第一、射擊の順序は始に内膳砲射撃より行ひ、次に對空砲射撃、次に其體於之に因るに遠距離射撃迄を終る。是より對空砲射撃の順序は相次ぎ及濃煙區、射撃の施行せらるる。

第五

第三、其の指牌者爲緊要の要領を記載し、次に體操操隊の第一、第二、第三、各種の放練及射撃に於て實施研究せらるる。

第六

射撃の射撃手は、射撃の習子、故其訓練開始の時に施行の精妙、或は遠くニシテカラス。

第七

射撃の準備射撃の配置、然るに適宜に合し其順序は是の如く、状況に對し、限り分り、除き其全部に其一部先適宜の方法で、射撃の射撃法、射撃の射撃法。

第八

射撃の射撃、射撃の射撃、射撃の射撃、射撃の射撃。

別に特別教育ヲ施シ射手ニ任ズル得ルシ

第九 内膳砲射撃ノ實地ニ就テ照準發射ノ訓練ト今時ニ射撃指揮ヲ行

フニ敵隊ノ手配ナリテ前ニ之ヲ行ヒ潛機會ヲ以テ之ヲ逸ルトコト無ク

セリ總行ルヲ要ス

第十 射手ノ指揮ノ受能ハルキトモ或モ独力射撃ノ効果ヲ收メルルハテ故ニ第三

章中射法及其適用并射撃修正法射撃ノ能力ニ應ジ適宜之ヲ

教習セシムルモノトス

第十一 本則ニ定メル各種教練演習ノ行ハ當テ部屬ニシテ射撃ノ教育在テ

各部署長其他ニ在テ其種類ニ應ジ適當射撃必ズシテ監督スルモノ

トス

# 第一章 照準發射

照準、要領

第一、照準、照準線、照準、皆向スルヲ云フ

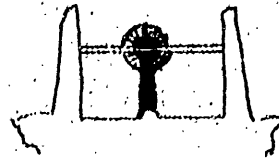
照準線、照準頂、照門、中央トシテ通スル直線（望遠鏡照準器在ハ

望遠鏡軸線）ノ延線ニシテ照準照門間ノ距離ヲ通テ照準線ノ

長サト云フ

照準器ハ目標中照準スル一点ヲ云フ

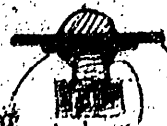
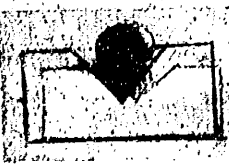
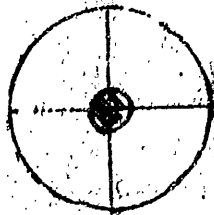
第二、各種ノ照準機、於テ正規ノ照準、尤圖ノ如シ



H字架照門ニ在テ照準スル照門、中央ニ

置テ照準頂ノ球トシテ照準、直ノ照門機

線、以テ照準頂ノ球、横切シテ二分、如クシテ云



横線赤煙を分

照準機  
赤煙

横線赤煙を分

夜中照準機 在る照準機、赤煙を分正シ  
横線赤煙を分正シ、如く直ニ如クシ

✓ 窓形照準機 在る照準機正シ照準機、中央位置  
シ基端正シ照準機、直ニ照準機、両端上縁  
ト合一ノ高サヲ示シ

望遠鏡照準機 在る其十字線、交点正シ  
照準機、合シ

○ 照準機を示ス

1520

第五

射子如何の場合、在るに正規、照準以て發射スルニテ

但し字取照門、在るに少、苗頭修正、代に為シ、又、其速力ニテ

行ハ目標ニ對シ、標着ノ所要ノ長、等、為、照門、一側ヨリ

照準、或、照準、照門、横線中適宜、所ニ見、如、照準

以テ、彈着ヲ修正、得ルニ、然レ、此、彈着修正法、十分、理會

光射子、独立、射擊スル、非、レ、六、猥、ニ、テ、利用スル、トス

第六

若干、大、有、ハ、目標、對シ、特、照準線ヲ、示シ、レ、下キ、外、且

中央、一、点、ハ、依、装、シ、テ、之、照準スル、トス

第七

照準、當、射子、洋、息、ス、ノ、要、矣、次、如、シ

一、各、人、性、質、及、視、力、依、多、ク、視、差、正、ク、免、ク、隨、テ、初期、ノ、モ、在

ル、自、正、テ、照準、セ、ル、如、ク、思、惟、ス、ル、其、實、不、正、テ、照準、セ、ル、也

アリ然レドモ練習ニ依リ其誤差殆ト之ニ至ルヲ得ルモニシテ其  
性癖ニ依リ幾多ノ練習ヲ經ルモ依然多ク誤差ヲ有ルモハ到  
底射手ナルニ適セサルモノトス

二 射手ノ常ニ正キ姿勢ヲ採リ頭ヲ真直ニシテ照準ルヲ要ス然レドモ  
其視差ヲ大ニシテ易キモノトス

三 眼ノ位置ハ常ニ照門ヲ適當ナル距離ニ道ヲ要ス過近トハ照  
門照星ヲ見大サノ比例適當トス照準ノ誤差ヲ来シ易シ通例  
眼ヲ遠クシ程益々精密トシ照準ヲ得ルモノト云ヒ遠近ナルトハ照準  
線ヲ失ヒ易ク打テ不正ノ照準トシテ阻ルモノトス

等トモ故ニ眼ノ位置ハ照門ノ後方適當ノ距離於テ常ニ是ノ位置ニ在ラ  
シテ如ク泳泳ニ練習ノトスニ要ス



其法置明瞭照星照所及照準具ヲ通視得ニ然モ身体甚

ニ此躬屈ス感照準突射ノ動作不便ナルヲ要ナラス

第六 照準一方より光線照準ヲ受ルトキハ照準當光線受ル方向

ニ偏倚セシメ易キモノナリ以テ宜ク之ニ注意スルモノトス

照準ノ傾リ光澤ノ異色ニ染ルルニ防クノ一手設ナリ

第七 望遠鏡照準器ノ前頂ノ如キ不便ナキノ事又目標視像ヲ大ニシ

極メテ精密ニ照準ヲ為シ得ルモノニテ最モ遠距離ノモノヲ照準スル適

スルモノトス

第八 正規照準ヲ以テ幾射光線ヲ常照準上ニ命中スルモノニシテ不正

照準ヲ以テ幾射光線ヲ常照準上ニ命中スルモノニシテ不正

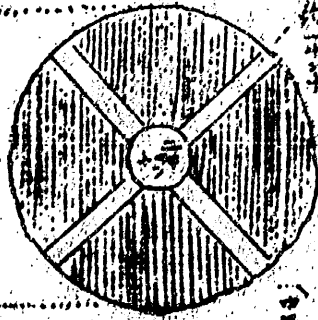
照準(望遠鏡照準器)在テ其ノ

偏倚(望遠鏡照準器)在テ其ノ

第一

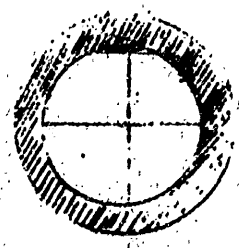
射手シテ照準要領ヲ理會シタル為教官无圖如標的ノ  
適宜砲口前ニ樹立シ砲口ニ无圖如標的ノ裝尾於幾人裝  
置ノ板キカシ尾栓孔ヲ砲口十字線ノ交點標的ノ中心  
正シテ通視ノ標的如砲口固是ニ次正シテ標的ノ中心ヲ照準元  
如ク照尺前頭ノ竊射手シテ順次照準者ヲ尾栓孔ヲ目標  
ヲ通視シ正シテ照準ノ成リ實理會セシム

約子  
小英子



砲塔砲口如標的ノ位置照準ノ  
遠キモ在リ標的外圍ノ九等ノ  
内圍及標色ノ準々

六三十一



此圖以別於内筒狀之其天  
與正之腰軸令其如射者標度  
リタルモノ

1525

茅三次教官魚尺及首頭ヲ要スルコトノ儀砲ヲ俯仰旋回シテ照準線ヲ

以テ他物動カシ射手シテ山名死砲就テ任意俯仰旋回シテ

射ヲ操シ正キ照準線成セシ教官ハ尾槍孔ヨリ其照準ヲ鏡

査シ精必要ニ應シ射手ヨリ尾槍孔ヨリ通視シ自己照準

正否ヲ自解セシム

教官ハ此方法ヲ及徹施行シテ其他適切ナル方法ヲ用ヒ

射ヲシテ迅速正キ照準ヲ為スト習熟セシノ今時照準

常射手ノ習癖照準ノ精粗倥傯等ヲ精密鑑査ス

等前項鑑査於常止照準ヲ為シ若クハ誤差有シ及

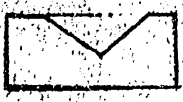
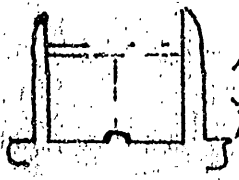
覆徹察ル練習ヲ為シテ猶全一ノ誤謬ヲ免ル能ハルモ

砲術長ノ檢定以テ射手ニ適宜モシテ爾後教練ヲ行フ

トシ

此証ト字形照門ノ中央及ノ字形照門ノ上縁表示スル為テ圖如ク細

線ノ張ルヲ得



照準發射ノ要領

第五

目標之照準スル當リ自他ノ運動ニ依テ均ス其狀況

然ラ各機ノ區別

不動目標ノ照準線ヲ正確ニ常靜止ニ移動スルキヲ

云フ

横動目標ノ照準線ヲ正確ニ左右ノ方向ニ移動スルキヲ

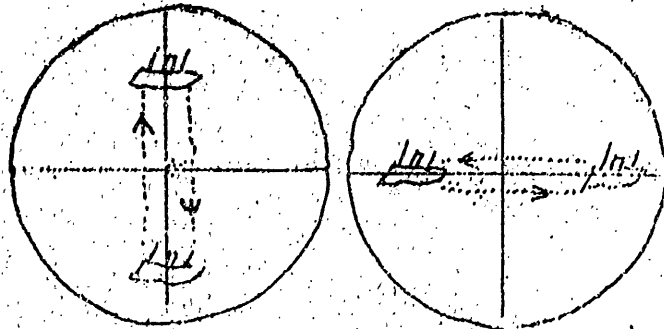
云フ

縦動目標ノ照準線ヲ正確ニ上下ノ方向ニ移動スルキヲ

波動目標ノ照準線ヲ正確ニ上下左右若シテ斜方并波動狀

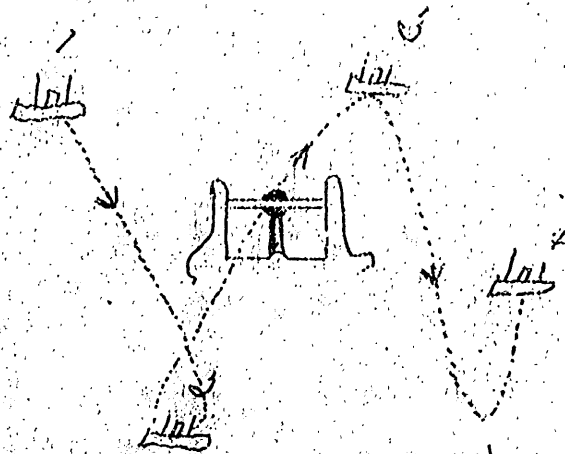
ニ移動スルキヲ云フ

横動波動波動目標ヲ統稱シテ移動目標ト云フ



標目動縦

標目動横



標目動波

1528

第五 不動目標ニ對スル照準發射其砲操法隨テ砲ヲ旋回俯仰シ精悉ニ目標ヲ照準シ當線準線ヲ眼中ニ保テ照準妥

定ナラシメ所要時機ニ發射スルコトス

第六

移動目標ニ對スル照準發射方法三種分シ甲、常照準線ヲ目標ニ移動シ伴ヒシテ之ヲ當テ如ク砲機ヲ旋回

シテ不斷照準保続シ要テ何時ニ發射シ得ル如クモ

乙、照準線ヲ目標ニ移動シ方向ヲ僅ニ其前方極向

ニ當テ目標來リテ之ニ會ヒテは瞬時ニ發射スルコトス甲、小

徑砲適用シ乙、中、大以上ノ砲適用スルニ適則トス

但シ目標移動速度急激ニ是ヲ測シテ不規則ニ發射スルコトス

第五 縱動及橫動目標對照準線射其他操式從縱動

目標對照準線先砲ヲ旋回シテ照準線ヲ目標ノ方向合シ

次絶ヘス砲ヲ俯仰シテ常照準線ヲ目標ノ運動ニ伴ヒ

横行目標對照準線先砲ヲ俯仰シテ照準線ヲ目標合テ水

平面ヲラシメ次絶ヘス砲ヲ旋回シテ常照準線ヲ目標運動

ニ伴ヒ申法若シ法依リ發射ス

第六 波動目標對照準線其砲操式隨絶全時若交叉

砲ヲ旋回俯仰シテ常照準線ヲ目標ノ移動ニ伴ヒ申法

若シ法依リ發射ス

第七 移動目標對照準線先砲ヲ目標運動ニ伴ヒ射斷

照準ヲ連続保持シテ速射砲射擊要訣ニテ其砲裝



概之適之如構成其手而此動作眼、手、脚等微妙ナル  
感應作用依リ迅速機敏其自然之致動行爲依行ハキ  
テ漸ク速ク練習積ムト其速ク及スヨリ容易且自然  
ニ行ヒ得ルニ至ルモ射手ニ断ク練習必ク此域ニ達スルカ  
キ

第一砲前測照準機有スルニ在テ射員一方照準機用目ヲ  
俯仰シテ射行ヒ他砲員多ク旋回シテ要ニ至ル言合ヲ  
以テ之ヲ指揮シ申法者ハ法必ク射行得ヘシ

第二船ノ動揺スルキ自標穴上ノ動ヲ爲ス動揺ノ本ノ自標移  
動速ク急ニシテ又其機敏範圍甚ク大ニ於射機會  
得極ク困難ナリトス故自標場合於自標機  
機度速動者ニ成ル時機必射ス如照準スルヲ要ス

通例日標上動シテ其極度ニ達シ將下向セシト是時ヲ最好  
時機ス

第三章 第三ノ乃主第三五ノ列記ニ照準發射ノ方法ハ必ク存ニ一是方  
法ヲ固執スルヲ要ス射手ハ槍体方性質及砲裝ノ狀態ヲ斟酌シ  
最モ照準發射ニ容易シテ射手ノ得意トスル一法ヲ模索シ之ヲ執達  
スルヲ要ス其主眼トスルノ容易ニ精確ニ照準ヲ以テ迅速ナル發射  
ヲ繼續シ得ルニ在リ

### 照準發射演習

第三章 此教練ノ行ノ為先ツ尤ノ方法ニ依リ照準鐵查ノ裝置ヲ準備  
シ教官之ヲ用テ射手ノ照準發射ヲ檢視スルニトス  
但シスコット式照準演習機ヲ用テ之ヲ行フ

又教管我錄ルル手ヲ助キトシ鑑査ヲ補助セシムルコトヲ  
得

一 砲、兩側ニ照準器ヲ有ルモノ在リ、之ヲ取付テ、照準器ノ  
整シテ、準シテ、全一、真ニ照準シ得ル如クス

二 唯一個、照準器ヲ有ルモノ在リ、尤、如ク鑑査機ヲ設置ス

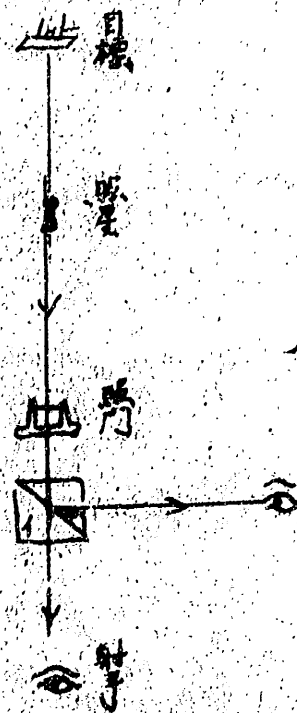
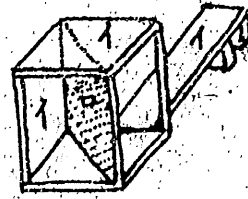
一 望遠鏡照準器、在リ、第一、示尺方法、準シ、固者、

照準機、始頭照尺、調整シテ、正シ、全一、真ニ照準スル如ク

ス、又此、方法、如何ニ種類、照準器、適用スル得ヘシ

一 V字狀又、ハ片狀照準器、有ル照準器、在リ、尤、如ク

鑑査鏡、照門、前方ニ、装置ス



木製又ハ金屬製ノ匣ニシテ之ニ口ハ淡ク赤色トシテ  
 夕淡ク暗色ヲ以テ之ニ蓋ニテ硝子板ヲ斜ニ敷キテ之ニ  
 其製作法ハ適宜トシ難ク於テ便宜製法トシテ之  
 射手ノ硝子板ヲ遠視ニ照準シテ敵官ノ側方ニ在リテ硝子板  
 可及射光映像ヲ依リ照門照星及目標ヲ視得ヘシ

1534

第五 現時我海軍ニ使用スル式照準演習機ノ其標的ヲ  
調製スル位置ヨリ俯仰若クは旋回スルニ隨テ漸次大ナル誤差ヲ生  
ス故ニ目標移動ノ範圍ヲ小シシ其誤差ヲ少クシテ所定目標的  
ノ示部合點ニ至ルニ加テ注意セザル要ス

第六 不動目標ニ對テ照準機射演習ノ第一ニ示部標的(砲)ヲ  
距離感應ノ適宜ナル位置ニシテ(砲)ニ向テ照準機若クは砲口前方約  
三米突乃至十米突ノ所於テ今一距離感應ノ適宜ニ三米突ヲ  
距テ併立シテ(砲)標的ニ對テ照準機若クは砲口前方約三米突ノ  
ヲ砲口集メ一名死砲ニ就教官ノ令ヲ以テ交互ニ左右ノ目標  
照準機ヲ教官ニ繼查裝置ニ依テ檢視シ射手ヲ發射シ  
時機ヲ表示シテ打テ「嗚」教官ハ射手ヲ打テ「嗚」毎ニ命

中「右」尤下等語以其結果ヲ射子告知シ直令シテ  
他標的ヲ照準セシ此方法ヲ反覆シ一分乃至三分毎ニ番  
換リ行フ

第三章

此教練於射子習熟を隨ヒ射子之又ニ鑑査行シム

第三章

シ又標的ノ時々適宜ノ艦外物ヲ用ル  
射子此方法ヲ數ニ次標的ナル艦外物ニ適宜ニ仰テ  
目標ヲ鑑査シ此演習ヲ行フ

但シ目標全距離在ルルハ鑑査装置ニ對シ照尺及首頭

ノ調整目標距離度差正故ニ目標ヲ他ノ目標

校出前要ル照尺由頭令射子ヲ迅速ニ之ヲ射ル

コトニ習熟セシム

其苗頭及照尺最初調整當其量ノ記憶シ置キ之ヲ

令スヘキモトス

第九

射手ノ習熟ニ隨ヒ可成迅速ニ照準スルヲ練習シテ助手ヲシテ各射手ノ發射秒時若一定時ニ於テ發射回数ヲ測

シム

第十

此教練ハ艦砲操練ニ於テ出來得限リ之ト共施行スヘキトス又此教練於テ數回ノ練習ヲ重テモ極其成績ノ甚クシク不

良ナルモハ砲術長檢定ニ依テ射手ノ適サレタリトシ以テ教練ヲ行

第十一

機動目標ニ對テ照準スル射演習ノ不動目標ニ對テ照準スル射演習ニテ後始メテニ多クモ先ツ機動ヲ緩

第五

徐移動を横動目標及び縦動目標に對して行其熟練  
を隨て漸次目標を移動し急激な如ク之を習熟せしむ  
始に全要領依り波動目標無誤に射すべし  
此教練は於て教官は射撃速度を令し初期は緩射  
トシ射手を熟練を隨て急射に至らしむ

第六

ソコト式照準機を依り波動目標に對し照準射撃演  
習の方法は第五乃至第六乃至第八に令し但其用を目標的  
ハ一由し適宜之を移動装置トシ又第一全一標的を  
目標を照準せしむモノトス

第七

此演習は於て獲射の時機を可成様法を演習適合せしむ  
一名を副銃機に就し射撃手は打て下鳴る毎手は令之



第五

各シ良山報セヨ知ノ射子ハ良山報測スルヤ

ハ次突射ヲ為サルモトス

時宜依リ發射要ニ適且尾栓ヲ開閉セシ又ハ標練用

藥莖ヲ裝填セシムコトヲ得

又前諸項ノ要

領準シテ第四ノ示覺順序依リテ行ハル其印兵用

標的ノ之目標移動標類及月日并射子ノ姓名ヲ記入

シ置テ其成績ヲ調査スル資供ス

又此教練ノ初期ニ在リテ印兵的ノ注意ニ每々其成績

ヲ高鳴シテ射子報シムルモトス

又為得ハ独リ印兵結果ニ依リテ鐵查機ヲ裝照準ス

第六

射、直否、檢スシ

用此式照準演習機、用直標的、最初、兵教ヲ付セル  
圖的ノ用ヒ次、横向斜向等各種ノ艦形標的ノ用スルヲ

可トス

第七

移動目標、對照準演習於、成績不良者、毎七  
表不動目標、對照準演習、教練ヲ施行セ、補正成  
績、不良者、砲術長、檢定、添射、手、ニ、  
以後、教練ヲ行フコトナシ

第八

射手各種ノ目標、對照準演習、方法、習熟セ、次  
以、砲射、射、手、於、實際、就、照準、演習、ヲ、  
シム

但ニ内膳砲射撃ノ始メル后ト雖モ本章ニ記載スル標準  
發射演習及其他適切ニ諸種ノ方法ヲ以テハ照準  
射法ノ教授ハ絶エズ及復施行スヘキトス

第二章 内膳砲射撃

第五

内膳砲射撃ハ主トシテ固有ノ配道ニ在リテ射子ヲ準備射  
手ニ配道ニ兵員ヲシテ之ヲ行シテ之ヲ總彈放ノ四分三ヲ之  
テ残余ヲ彈放以テ般掌砲兵及掌砲助手ヲ特ニ射撃手  
教育ヲ施スベキ員ニ先キトシテ次ニ般砲手ニ適宜射撃手セシ  
ムベシ

第六

内膳砲射撃之各例射撃時復射撃砲台射撃及戰  
闘射撃分ツ

谷田射擊

第一 谷田射擊、谷田獨立射擊、谷田準照準射、

射、射手ヲ訓練スル目的トシ、併テ指揮者ヲシテ單砲射

擊指揮ヲ練習セシムルトシ、之ヲ近距離射擊及遠距離

射擊ニ分ツ

第一 近距離射擊、於テ九、如標的ノ約百米、距離ニ破撃シ

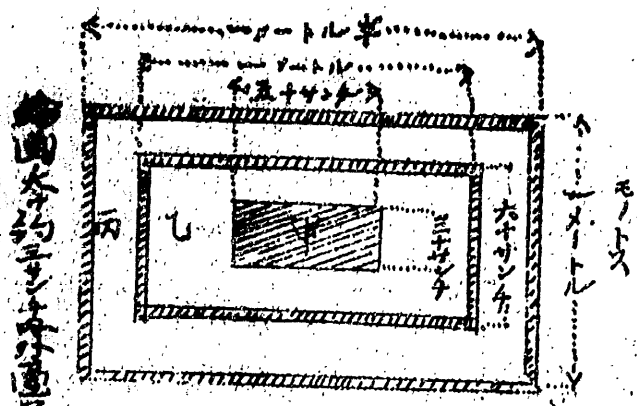
者、的ニシテ精確射距離ヲ整テ、各射手ヲシテ、一四、六、

八、九、射手、發射終ル、毎着の、其彈底ヲ調

査シ、番号ヲ以テ、之ヲ報セシムルトス

此射擊、於テ命令、豫放、突撃、ノ各、九、ノ、

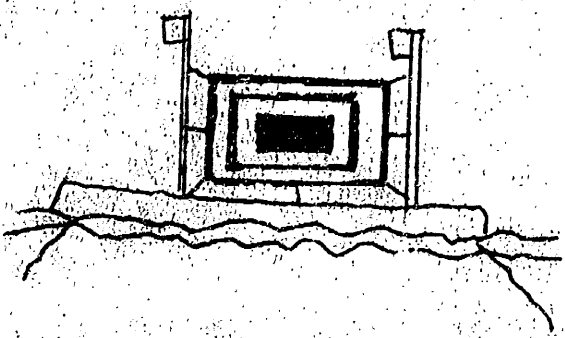
甲區、乙區、丙區、ノ、各、二、



日本古来の  
三センチの  
寸法

但し  
標記  
の  
寸法  
は  
三  
センチ  
に  
等  
し  
る  
事  
を  
告  
げ  
る

此標の  
糸線  
古帆布  
板等  
製後  
上展  
珠  
の  
上  
に  
置  
く



1543

第參 此射擊於射子得共三四平均五十三連得此又復此

射擊子行シテ三四及尚其數達得此トモ施行共

檢定ニ依リ射子ニ適ナルモノトシテ以後ノ教練ヲ行フコトナシ

第肆 此射擊ハ一回ノ發射彈數ヲ五發トシテ二人ニ施行スル得又

少ニ費シ得ル時日及彈數ニ應シ數回又復之ヲ施行スルト

得

第伍 航海ニ在テハ距離ノ火サ比例ヲ失ハサレ如ク縮小セル適宜標的ヲ

複製シ其適宜ノ板面ニ縮小セル標的ヲ面ニ使寫之ヲ艦外

ニ斗出シ又ハ岸邊ニ此射擊ヲ行フコトナシ

但シ其距離ハ内艦砲ヲ銃口測リテ之ニ銃口米尺標的ニ置テ之

其尺ハ百ト冊長十五冊ト遠國ニ準ス

第六節 砲全時此射擊之行情令一列每必二個標的ヲ

用各射擊可成全時之射擊停止如以該者之

時間之省略スヘシ

第七節 第一期艦砲放練射擊之行情少一面必此射擊ヲ行

フヘキモノトス

第八節 遠距離射擊之近距離射擊於平均五十米以上成

績ヲ得ルモノニ就テモ行フモノトス

第九節 遠距離射擊之靜的射擊及動的射擊ニ分ツ

第十節 靜的射擊之近距離射擊ト全一標的(但レは四ヲ設ケル)

ヲ照準シ容易ニ完全標的ヲ命中ス置テ十文字狀又ハ輪圓

圖ニ著便有トスヲ約四百米距離及破擊之近距離射

擊下全一方法依射擊センシ

但此後之此上其以請命軍謀故以真んトス

英中一

動的射擊之四面靜的射擊之終り後行

既若端州之靜的射擊上全一標的鬼の四百本突

距離於邊之往假之靜的射擊上全一方法以下

之ヲ行フモノトス

英中一 遠距離射擊之概念之進行之終り後四面動的射擊

終り後其順序均既之終り後適宜靜的若動的

射擊之行又一個標的對之減至二門以上ノ確ヲ以テ

射擊之行ノ下得

英中一 射子各一回靜的射擊及動的射擊之行之終り後



其四、各射隊、定ル所ノ位置、故ノ射シ、  
又其成績、各射手毎、調ヒテ、射隊、父、各射手  
全体ノ成績ヲ調査スル事、得

第五

動的射撃ニ於テハ、一回、各射手、射撃ノ開始ニ際  
於テ、距離、令シ其変化、之ヲ告知ス、自ラ、  
者測リ、適當ノ修正ヲ為シ、習修セム

第六

砲等二期以下、教練射撃、行ハ、前々モ、必ス一回、  
遠距離動的射撃、施行スル事トス

第七

固者ノ配置、在射手及後備射手ノ配置、凡共員  
以外者、唯各射隊、行ハ、他種射撃、為シ

シヤルモノトス

特種射撃

第七

特種射撃ノ規定、各旧射撃ノ行ハサルトキ之ニ  
代エテ施行シ若シ特種ノ研究ヲ行ハントスルトキニ施行ス  
ルモトス

第八

特種射撃ハ其目的ニ應ル適宜ノ標的ヲ用テ復算ノ  
方法ヲ以テ毎身施スルモ、ニシテ時ニ之カ方法ヲ一ニ及スルト  
トシ

但シ各旧射撃ノ代ニテ施行スルモノ可成其要領ニ準ル具シ

出来得ル限リ其成績ヲ調査スルモノトス

第九

特種射撃其目的ニ應ル全時ニ兩以上ノ砲以テ射撃  
ヲ施行スルヲ得

砲台射撃

第七十 砲台射撃、射撃ヨシテ照準発射場熟シタル合時ニ  
主トシテ各級指揮者ヨリ射撃指揮及ヒ修正ヲ習  
練セシムルヲ目的トスルカニ一回、遠距離射撃ヲ終リタル  
ニ就テ之ヲ行フモノトス

第七十一

砲台射撃ハ各砲台若シテ其ノ部又ハ砲台区合ニ均クハ全一  
ノ砲種毎ニ行フモノトシテ標的ハ各砲台遠距離射撃ノモ  
トナリテト合一ニシテ用ヒ動的又靜的トシテ其距離ハ  
約四百米突シテ成績ハ各射撃隊ノ對シテ命中百分比  
以テ之ヲ計算ス

但シ合時ニ使月ニ砲台必ス三門以上ニシテ要ク又砲台其他ハ

以ノ固有配置ノ順序ヲ以テス

### 戰 闘 射 撃

第五 戰闘射撃ノ各砲台(若シ各砲機)一砲台射撃

ニ施行シタル后ニ之ヲ行フニシテ各職員ヨリ戰闘配置

ニ就テシテ内騰砲ノ全數ヲ使用シ之ヲ行フニシテ而使用

標的距離成績計算等砲台射撃ノ全シ

第五 一砲台戰闘射撃ヲ終リタル后ニ必ズシテ射撃ノ順序

均シク各砲台射撃砲台射撃及戰闘射撃等ヲ直

宜ク及廣ク施行スルニトス

第六 砲台射撃及戰闘射撃ノ各砲台独立又對抗射

撃ニ於テ之ヲ施行スルニトス

各砲射撃各艦独立ニシテ行ヒ已ニ得ルモノ外對  
抗射撃ニ於テ之ヲ施行セラルトス

第五

艦砲戰開射撃ヲ行フ前リモ心ス一回内廣砲ヲ以テ

戰開射撃ヲ行フヘキモノトス

報 告

第六

各艦ハ毎月一日ニ於テ尤例ニ示ス所ノ書式ニ隨ヒ其前月

中ニ施行シタル内廣砲射撃ノ回數種類成績

等ヲ報告スルシ

用紙適宜

明治... 年... 月... 日... 軍艦... 内膳砲射撃報告

射撃種類及回数	標的の種類	使用する砲種及銃	若し射撃... 回数	得点	成績	記
第一面各向近距離	正規標的	六寸砲	八名	六二	六二	砲中... 射撃... 八十...
第二面各向遠距離	正規靜的	六寸砲	十四名	六二	六二	砲中... 各首... 射撃... 八...
第三面各向遠距離	正規動的	六寸砲	四名	六二	六二	砲中... 射撃... 八...
第四面各種	特別標的	六寸砲	一名	六二	六二	砲中... 射撃... 八...
第五面砲射撃	正規動的	六寸砲	四門	六二	六二	砲中... 射撃... 八...
第六面砲射撃	正規動的	六寸砲	六門	六二	六二	砲中... 射撃... 八...
第七面砲射撃	正規動的	六寸砲	六門	六二	六二	砲中... 射撃... 八...
第八面砲射撃	正規動的	六寸砲	六門	六二	六二	砲中... 射撃... 八...

備考

特種射撃... 試射... 距離測定... 練習目的... 小樽... 旗... 砲... 射撃... 記... 支...

年月日

軍艦... 艦長... 官氏名

此報告... 於... 各向射撃... 特種射撃... 砲台射撃... 戰鬥射撃... 各種... 施行... 回数... 計... 各欄中... 其種... 射撃... 記... 支... 難... 之... 備... 中... 記... 載... ス...

第三章 射法

第百廿七 射法 射擊ニ於テ一般ニ遵守スルニ必要ナル法則并ニ射擊ノ  
指揮及修正其他射擊等ヲ有効ニ指導スルニ必要ナル諸要  
件ヲ包括ス

1553

第百廿八 射擊ノ修兵射手ノ照準及發射ノ時機ニ正シキモテモ  
トモ基礎トシテ之ヲ行フモノト故ニ射手ハ如何ナル場合ニ在モ  
沈着ニ精密ニ照準ヲ以テ正キ時機ニ發射スルヲ要ス決シテ  
自己ノ臆斷ヲ以テ粗忽ニ發射ヲ行フカラス粗忽ニ發射ハ  
射彈ヲ無効ニ漏セシムルニ至リ且指揮者ヲテ其修正ヲ誤ラシム  
ト深ク射手ノ銘心ニ至リ要件トス

第百廿九 射手ハ爲得限ノ常ニ自己ノ射彈ノ彈着ヲ注意スルヲ要ス

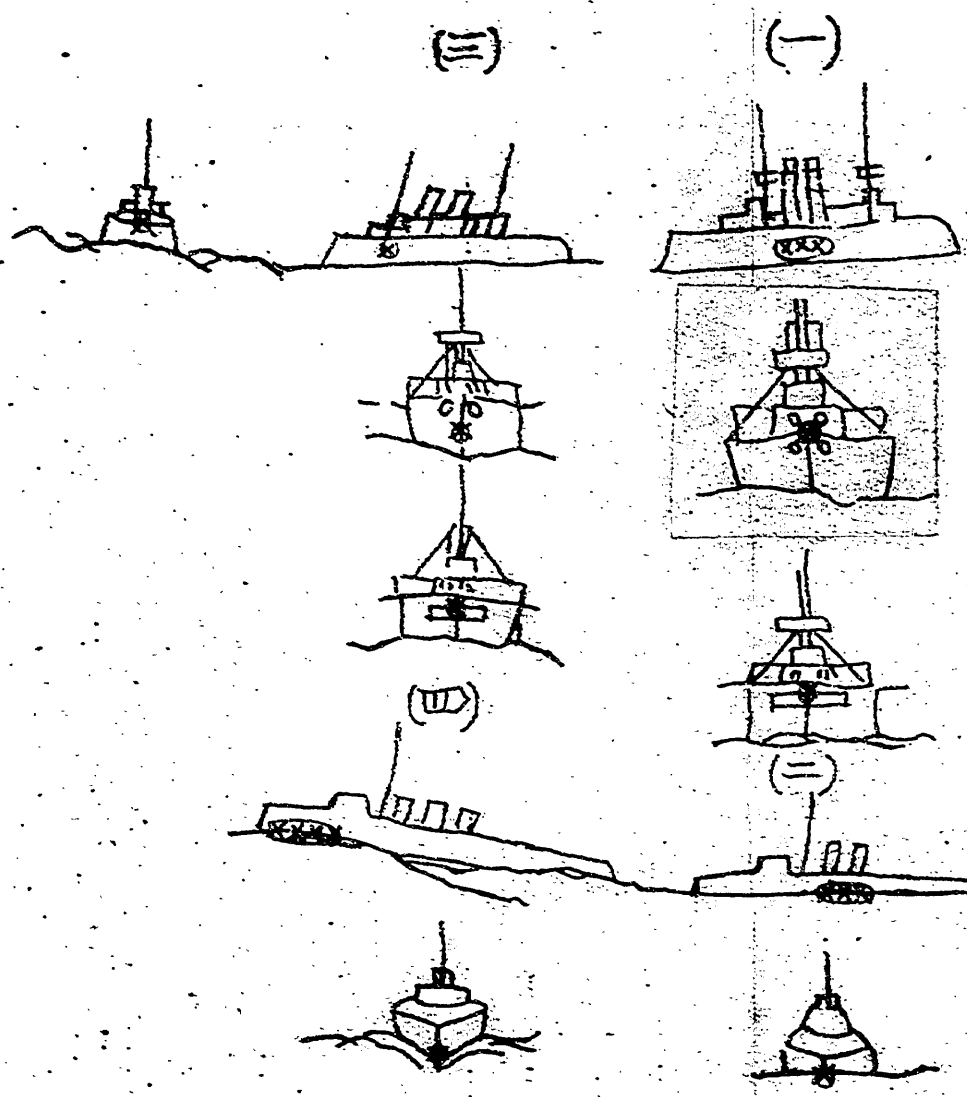
是時臨敵獨事任之當自彈着修正之  
丸要件ナレバ精練先射手ハ彈丸飛行時  
關係等依多數砲合時射撃スルモ於テモ  
尚畧カ自己彈着ヲ識別得ルモニテ多クハ  
經驗ニ基ク自然ニ感得ニ由ルモ

トス射手ハ練習ヲ積ム此女域ニ遠キカ

幕今  
射手長ク照準ヲ突射ヲ連続スルモ其多クシ  
眼力ヲ疲勞シ照準ヲ困難ナシム故ニ指揮者ハ  
適宜射手ヲ交代セシムシ又射手ハ自ラ  
眼ノ疲勞ヲ感シテ直ニ之ヲ指揮者ニ報スルヲ要ス

幕今  
射手ハ照準点ヲ指示セテトキ外左ノ如ク之ヲ撰定ス  
一靜止艦船ニ對シ烟突ノ下方ニ覺舷側ノ中央





縦向九キハステーション又ハステーション上縁  
 二 静止セル水雷艇及駆逐艦ニ對シテハ烟突下方水際  
 縦向九キハ艦首艦尾ノ水際  
 三 駛航セル艦船ニ對シテハ前艦橋下方ニ當ル舷側中央  
 縦向九キハステーション中央又ハステーション上縁  
 四 駛航セル水雷艇及駆逐艦ニ對シテハ司令塔ヨリ前方  
 水際  
 縦向九キハ艦首ノ水際若ハ艦尾ノ上縁

第廿

各砲ニ附屬セル射程表ハ定基準状態ニ於ケルモノヲ示ス過キ  
ス實際ノ射撃ニ於テハ距離ノ測定精確ナルモ彈丸必ズシ

モ正シク其距離ニ着達スルモ非ス故ニ其時ニ於テ彈着ニ  
影響ヲ及ボスニキ各種ノ要素ヲ遺漏ナク考察シテ適當

ノ修正ヲ行ハルカラス

第廿

彈着ニ誤差ヲ起スキ原因中最モ結果ノ著キモノハ臆

内瓦斯壓カノ大小ニ依ル初速ノ変化ニリトス

無烟火藥ハ貯藏スルニシテ渡ルルキハ通常其壓カヲ減シ射

程ヲ短縮シ又其温度高キトキハ壓カヲ増大シ射程ヲ伸

延ス

發射ヲ続ルニ隨ヒ砲身殊其内臆漸次其熱度ヲ高隨

テ瓦斯摩力ヲ増進シ射程ヲ伸延スルニテ其熱度過昂ニ  
トキニカ爲シ臆癸ヲ起ス危險アリ故ニ砲身ノ熱度ノ昂  
防ノ爲シ砲塔砲ニ在テハ少シモニ幾毎ニ其他ノ砲ニ在テ砲身  
熱度ノ昂ノ状況ニ依リ約五幾以上適宜ニ幾毎毎冷水  
ヲ以テ臆中ヲ洗滌シ猶要スルニテ砲身全部ヲ冷却スル手  
段ヲ施ス

1557

兼五 寒冷ノ天候ニ在テ熱度ノ過低ニ起因スル瓦斯摩力不足  
ノ爲シ通例最幼ノ三幾ノ射程短キラ常トシ砲身適宜  
ノ熱度ヲ有ルニテ初ニ定メ射程ニ違ハラ例トス  
第ニ照準器ノ状態不正トシテ彈着ニ大ニ誤差ヲ生故ニ取扱ハ  
極ニ慎重ニシテ必要ノ手入其他ノ爲シ之ヲ裝脱スル

キ場合當リテ主砲在テ必ス砲術長其他砲在テ必ス  
其部署長ル將校監督下ニシテ行フヘキトス

第六 砲台長時々其指揮下ニシテ砲照準器正否ヲ試験シ  
聊モ疑ハシキヲ発見セバ砲術長立會ラ以テ更ニ精密ナル  
檢定ヲ行ヒ適宜修正法ヲ定メシ又艦砲射撃ヲ行フ前  
ニ必ス其正否ヲ檢定スキモトス

第七 各砲台長及砲台附ル將校射撃諸元修正ラ正確實  
施スル材料ニシテ左ノ諸表必ス之ヲ準備シ射撃ニ當リテ  
推シ帶スルヲ要ス

- 一 彼敵ノ速方及其針路ト射線トノ交角ニ應ル苗頭修正表
- 二 風力ニ對スル修正表

三射距離(每百乃至五百)對危險界表

危險界其距離於各種艦艇戰艦巡洋艦

橫向縱向斜向於發効標的面對

四射距離(每百乃至五百)應苗頭及線對彈着偏

差表

五砲耳軸線傾斜對修正表

六其砲固有誤差對修正表

但其量一定不変砲術長兼認ヲ経テ表ニ記

上下照尺苗頭自盛等ニ貼記スコトヲ得シ

右諸表可成簡明適切ニ調製シ即時必要ノ數量ヲ

見出得ル如ク要ス又(四)ノ如ク為得ル標準トス

ハキ概教之ヲ暗記シアルヲ要ス

第六

九ノ射撃ハ特別ノ場合ニ於テトキハ先ツ測定距離基  
キ試射ヲ行ヒ其彈着ヲ觀測シ測定距離ヲ修正シ有  
効ノ射距離ヲ発見シテ後始テ全砲台若クハ全艦以下  
準之ノ射撃ヲ開始シテ右射撃ヲ継続スル間ハ測定巨  
砲ノ変化ト彈着觀測ノ結果ニ依リ射撃諸元ニ必要ナル  
修正ヲ行フモノトス

第七

測距器ハ大抵其機固有ノ誤差アルニ由ルニ由テ四千米突以上ノ測定  
距離漸次ニ不確實トナリ且ツ測距者ノ視力及熟練ノ度ニ  
依リ更ニ若干ノ誤差ヲ加フ故ニ之ニ據テ得ル測定巨砲信  
頼スルハ不可ナリ目測巨砲ニ至リテハ其誤差愈々大ナルヲ以テ也

ム得サル外之ニ據ルハカラス

茅空 射撃時間長キ渡ルキ情况之ヲ許セ時極ク短少ル時間ヲ

限リ一時射撃ヲ止シ更ニ試射ヲ行ヒ射撃ヲ再始ルヲ可ク

茅空 試射ハ可成口徑大キ速射砲ヲ用ヒ指令突射依リ熟練ナル

射手ヲシテ幾射セシム可トス又大キ遠距離ニ在テ多數砲ヲ

發若ハ連發集注又大口徑砲ヲ以テキハ精確ニ觀測ヲ為シ

難キモノトス

各艦ニ於テ平素射撃ノ成績徴ニ試射ヲ行フキ基準砲若ク

ハ基準砲台ヲ定メ置クコト必要ナリ

茅空 三彈着観測ハ高所ヨリスレ非セハ確實ナラズ故ニ射撃官ノ少シモ名

ノ適任尤観測者ヲ上橋接駁ニ簡單迅速ニ碇置ルハ通信

法ヲ識ル事也

為得ハ觀測者適當將標ヲ以テ之充ル可トス

第九由目標ヲ近シ落着テ射彈ヲ近彈ト稱シ遠シ落着テ射彈

ヲ遠彈ト稱ス

全ク射距離ヲ以テ數射テ多數砲ノ射彈ヲ落着テ區域

ヲ散布界ト稱ス

彈着ノ觀測遠近彈若ク散布界ヲ明識認テ以テ毒

尤眼目トス

第十射彈往々不規則ニ遠着若ク近着テテテ常ト故ニ特

別場合外彈着觀測可成多數ノ射彈ノ結果依テテ

ニテ精良ノ砲在モ少シモ連續ニ發以上彈着ヲ觀測シテ



此結果ニ非サハ射撃諸元修正材料トスヲ得ヌ又横ニ目標  
ヲ外シテ射撃略ホ其遠近ヲ判定シ得ルキニ在テモ射撃諸  
元修正ノ材料トスヲ得ヌ

又不規ニ遠着シ若クハ近着シ小數ノ射撃ハ散布界境界  
ヲ決定スル材料トスヲ得ヌ

第九 遠彈若クハ近彈ノ目標ヲ距離ハ側方ヨリ觀測スル極  
ニテ近距離ニ於テ高所ヨリ觀測スルニ非サハ適當ノ判定ヲ為シ  
難キモノトス故ニ明カニ彈着ヲ認ムルトキトモ自測ヲ以テ推  
定スル彈着点ノ目標間ノ距離之ヲ以テ直ニ射撃諸元修正ノ  
材料トスヲ得ヌ

第十 二艦以上同時ニ同一目標ヲ射撃スルニ他艦ヨリ速ニ急速度以テ

射撃ノ必多数砲ヲ存察シ或特巨彈ヲ連発ス等彈着  
ニ特殊ノ形状ヲ呈セムニ非カ自他ノ射彈ヲ識別シ難キ  
トス然レモ射撃速度缓慢トシテ彈丸ノ飛行秒時又ハ  
各砲ノ發射秒時間隔等徴シ自他ノ射彈ヲ識別スルヲ  
得シ

第九 緩徐若クハ大ニテ速度ヲ以テ距離ヲ変化ス自標對シテ行  
試射基準砲(考略)ヨリテ測定距離ヲ以テ發射セシ毎發  
射彈着ヲ觀測シ射距離ヲ修正及射撃ヲ開始左標準  
依リテ行クモトス  
距離ヲ減シタル自標對シテ最初遠彈ヲ得ルトキ漸次  
射距離ヲ修正シテ終近彈ヲ得ルニ至リ其射距離ヲ以テ

全砲台ノ射撃ヲ開始ス

最初近彈ヲ得ルニ漸ク距離ヲ増加ス終ニ遠彈ヲ得ルニ至

ラン最右ノ近彈ヲ得ル射距離ニ僅ニ少キ射距離ヲ以テ全

砲台射撃ヲ開始ス

距離ヲ増加シタル目標ニ對シテ此及對要領ニ隨フ

何レ場合ニモ有効彈ヲ得ルニ直ニ其射距離ヲ以テ全

砲台射撃ヲ開始ス

第九試射ノ爲ニ前以テ砲ノ齊整又ハ急速ニ連發ヲ行ハシムル場合ニ在

テ其射彈ノ約半數目標ノ前右ニ落下スルニ有効彈ニ準シ

テ多數遠彈ヲ有テ遠彈ト見做ス入身數近彈トシテ近彈ト見做

テ。彈高ノ変化爲テ自標ノ對シテ測定距離ヲ用テ基準砲ヲ準シ

射ヲ行シテ爲砲名ノ急速ヲ連發ヲ行ハシ其結果ヲ觀測シテ左  
ノ標準ニ依リ其修正及射撃ノ開始ヲ行フモトス

距離ヲ減シツアル目標ニ對シ最初多數ノ遠彈ヲ觀測スル又ハ約

半數ノ遠近彈ヲ觀測スルトモ速ニ多數ノ近彈ヲ得ル迄射距離

ヲ減シ該射距離ヲ以テ全砲名ノ射撃ヲ開始ス

最初多數ノ近彈ヲ觀測スルトモ直ニ其射距離ヲ以テ全砲名ノ

射撃ヲ開始ス

距離ヲ増加シツアル目標ニ對シ其反對ノ要領ニ從フ

第三 何レノ場合ニ於テモ試射中基準砲ニ令セシテ射撃ヲ請元其

他砲ニ在ラモ必ス之ヲ整即時射撃ヲ開始シ得ル如ク準備シテ

ルヲ要ス

第○二射撃中射距離爲修正測定距離ノ変化ト擇者觀測結果ニ

應シ之ヲ行ヒ其修正量大ナルハ必ズ照尺ヲ改調シテ之ヲ慮シ  
微ク修兵照準点ヲ上下シテ之ヲ行フモトス

但シ試射在テハ必ズ照尺ヲ改調スルキミテ照準点ヲ変スルコト

ナシ

又特別情況之ヲ必要トスニ非セバ決シテ照準点ハ百標以

外ニ移スガラハルモトス

第○三距離ノ変化ニ應シ照尺ヲ改調スル其変化ノ量其射距離ノ對

ル危険界ノ半量ヲ超元ニ至テ始メテ之ヲ行フキモミテ之ヲ微

細ナラサレテ一般ノ法則トス

遠距離ニ於テ危険界ノ量甚多キモ若シ距離ノ変化ノ急激

シテ間断ヲ照尺ニ改調スルヲ要ス如キ場合ニ在テ危険界ノ全量若  
 自倍數ニ標準トシテ照尺ノ改調シ其範圍内ハ現用照尺ト刻々  
 通報シ乘此測定距離ト大小ニ應シ砲台長以下適宜照準尺ヲ上下  
 シテ要ス修繕ヲ行フトス例ニ測定距離現用照尺ヨリ大ナルハ烟  
 突付根ヲ狙ヒト令シ之ヨリ小ナルハ實際ヲ狙ヒト令スルカ如シ  
 蒸島 彈着觀測ニ當リ目標ノ位置射彈散布界ノ中央ニルカ如ク觀  
 測スルハ其射距離ノ適當ナルトス  
 蒸島 適宜速度ヲ以テ距離ヲ短縮シテ自標對シ其位置射彈散布  
 界ノ前半ニ在ルカ如ク觀測スルハ散布界ノ大小ニ應シ直射距離ヲ  
 修正スルト無ク自標ヲテ散布界ノ中央ヲ通過シ其後半ニ位置ス  
 ルニ至ラザルニ散布界ノ前半ニ位置スルカ如ク射距離ヲ修正スルトス

漸次距離ヲ増加スル目標ニ在テ其反對ノ要領ニ從テ

第六 距離ニ變光カス其變化極ク緩徐ナル目標對シテ常目標ノ散

布界ノ中央ニ位置セシク射距離ヲ修正スヘキモノトス

第七 射彈ノ觀測ニ當リ遠近彈ノ教相半スルカ若ク遠彈ノ教近彈ヨリモ

少ク多キトモ於テモ猶ホ近彈ノ教甚クシク多キ如ク誤測シ易キモノトス

觀測者ノ位置益低ク目標ノ高サ益大ニ隨テ愈此傾ミ大ニ又其結果

現象現著スル命彈ノ之ヲ認識シ難キヲ以テ往々射距離極ク不適

歎止キ在リモ彈丸ノ救近着シテ如ク誤測シ易キモノトス是レ射彈ノ

觀測ニ當リ最モ注意スヘキ事項ナリ

第八 二發並連銃確實ニ觀測シ得ル右徑砲ノ彈着若ク確實識

認シテ命彈ノ射距離修正ノ材料トシテ最モ適切ナルモノトス故ニ苟モ

是ヲ觀測シ得ルトキ不確實ニ散布界標準等ニ依リ無ク  
是ヲ以テ射距離ノ適否ヲ判断スラ要ス

差別苗頭修正彼我ノ針路速力及射線ノ方向風向風力等ニ鑑

ミ修正表依リ必要ノ數ヲ求メ猶ホ彈着ヲ觀測シテ之ヲ修正  
ス

差ニ高速力ノ駛航ニ驅逐艦ト夜航ス如ク場合ニ在テ如何類

繁ニ射距離ヲ修正スルモ正シク時機ニ適マシタコト困難ナリ如

キ場合ニ在テ目標ノ進行ス直前ニ射彈ヲ集中シ周際ニ射

彈ノ散布界ヲ形成シ目標ヲシテ的其中央ヲ通過セシムル如ク此

方法ヲ反復スル可トス

第三射撃效果ノ大小ハ命中彈ノ多寡ヲ以テ之ヲ稱スルニテ之ヲ二種分



得<sup>レ</sup>六時間長短<sup>ニ</sup>拘<sup>レ</sup>テ幾<sup>ク</sup>射<sup>テ</sup>彈<sup>ノ</sup>數<sup>ヲ</sup>對<sup>シ</sup>テ他<sup>ノ</sup>突<sup>ク</sup>  
射<sup>テ</sup>彈<sup>ノ</sup>數<sup>ヲ</sup>如何<sup>ニ</sup>拘<sup>レ</sup>テ一定<sup>ノ</sup>時間<sup>内</sup>於<sup>テ</sup>ハ效果<sup>ト</sup>シ他<sup>ノ</sup>突<sup>ク</sup>

戰<sup>術</sup>上<sup>ニ</sup>要<sup>ス</sup>ル除<sup>キ</sup>遠<sup>ク</sup>距離<sup>各</sup>緩<sup>ク</sup>射<sup>テ</sup>常<sup>ニ</sup>射<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>ハ射<sup>撃</sup>ノ效果<sup>ト</sup>  
ハ前者<sup>ヲ</sup>主<sup>シ</sup>テ近<sup>ク</sup>距離<sup>及</sup>急<sup>ニ</sup>射<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>ハ射<sup>撃</sup>ノ效果<sup>ハ</sup>后者<sup>ヲ</sup>主<sup>ス</sup>  
トス

第<sup>ニ</sup>實際<sup>ノ</sup>射<sup>撃</sup>當<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>状況<sup>亦</sup>化<sup>シ</sup>極<sup>リ</sup>テ決<sup>シ</sup>テ律<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>推<sup>ス</sup>

カ<sup>ス</sup>前<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>系<sup>列</sup>記<sup>述</sup>所<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>極<sup>ニ</sup>テ簡單<sup>ナル</sup>状況<sup>於</sup>テハ適切<sup>ナル</sup>  
標準<sup>ヲ</sup>示<sup>ス</sup>過<sup>キ</sup>カ<sup>ル</sup>故<sup>ニ</sup>極<sup>限</sup>ナ<sup>キ</sup>各種<sup>ノ</sup>状況<sup>對</sup>シテ唯<sup>ニ</sup>  
其<sup>ノ</sup>形式<sup>ニ</sup>拘<sup>レ</sup>テ<sup>ハ</sup>諸<sup>ノ</sup>法<sup>則</sup>精<sup>神</sup>ヲ適切<sup>ニ</sup>應用<sup>ス</sup>ル<sup>ト</sup>ス  
其<sup>ノ</sup>應用<sup>戰</sup>闘<sup>上</sup>要<sup>ス</sup>ル適合<sup>ナル</sup>極<sup>ニ</sup>テ緊<sup>要</sup>ナ<sup>リ</sup>

而<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>應用<sup>適</sup>否<sup>ハ</sup>平<sup>素</sup>實驗<sup>研究</sup>如何<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>シテ定<sup>ム</sup>ル<sup>ト</sup>ス

聯隊法令第六號

朝霧

右臨時第一驅逐隊ニ編入ス

明治廿七年十一月廿二日

聯合艦隊司令長官東郷平八郎

聯隊法令第八號

第三九號艇  
第七一號艇

右臨時第十二艇隊ニ編入ス

明治三十七年十二月廿二日

聯合艦隊司令長官東郷平八郎

聯隊法令第八號

右臨時第五戰隊ニ編入ス

軍艦 薄雲

右臨時第五駆逐隊ニ編入ス

明治三十七年十二月廿四日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

軍艦 朝日  
軍艦 龍田

聯隊法令第八九號

第一艦隊

右臨時第三艦隊ニ編入ス

第十四艦隊

右臨時第二艦隊ニ編入ス

(附令)

第一艦隊ハ青泥窪ニ面航シ片岡第三艦隊

司令長官ノ指揮ヲ受クヘシ第十四艦隊ハ第

一艦隊ノ青泥窪ニ到着シタル後片敷ニ面航

必要ナル修理ニ着手スヘシ

明治三十七年十二月廿八日

聯合艦隊司令長官東郷平八郎

聯隊法令第九〇號

常備艦隊日課週課規則及常備艦隊艦船乗員上

陸規則中左通り改メ明治三十八年一月一日ヨリ実施セ

シム

明治三十七年十一月廿八日

聯合艦隊司令長官東郷平八郎

○常備艦隊日課週課規則中改正

週課表日曜午後ノ欄内

休業ヲ休業及被服繕ヒニ改ム

同木曜午後ノ欄

被服繕繕上ヲ削除シ午前午後ノ曳線ヲ削ル

○常備艦隊艦艇乗員上陸規則中改正

第四條第項中木曜日ヲ土曜日ニ改ム

第六條中木曜日ヲ土曜日ニ改ム

第十二條全文ヲ左ノ如ク改ム

前條ノ願上陸ハ成ルク月火水木曜日如キ乗員一

般ニ關スル操練日ヲ避ケ金曜日午後ヨリ次週月曜日午

前八時迄ノ間ニ於テ之ヲ許スモトス